西南学院大学とチャペル

村上 隆太

この度新しい大学チャペルが建設されたことに伴い、旧チャペルについての記録という意味も含めて私の記憶にあるチャペルに関する事柄を思いつくままに記してみる。中には『西南学院七十年史』、特に下巻の一部、また『写真　西南学院大学50年』と重複するところがあるかもしれないが、それはやむを得ないことと思う。個人の経験は全体の流れの中で積まれていくものだからである。

◆ランキン・チャペルの記憶

ランキン・チャペル（旧大学チャペル、正式名称は大学講堂）が完成したのは1954（昭和29）年10月であった。その時私は西南学院高校の生徒で、1956（昭和31年）に大学文学部英文学科に入学して初めてランキン・チャペルでのチャペルに出席した。ランキン・チャペルの完成当時、福岡市にはこのような立派なホールが九電の電気ホール以外にはなく、音楽会や講演会など各種のイベントがランキン・チャペルで行われ、言わば福岡市民の文化的行事の根拠地ともなっていたことは良く知られている。そのような折には、旧市電「防墨前」停留所から、或いは「西新」からぞろぞろと参加者の列が続いていた。クリーム色のコンクリートの建物は、いかにも戦後の新時代の、垢抜けた先進的なアメリカ文化の象徴のような存在であった。キリスト教自体が、敗戦の貧しい日本の状況に新しい希望を与える精神の源として一般の人びとにメッセージを訴える力をもっていた。西南学院そのものが、旧帝大の九州大学よりも明るく新鮮なイメージを持つ学校として受け入れられ、アメリカから派遣された宣教師は一種の憧れの気持ちで学生たちにアピールしたことは間違いない。その後もテレビが普及するまで、時折映画などもランキン・チャペルで上映された[1]。

ランキン・チャペルの建設に先立つ1952（昭和27）年に大学旧１号館が完成していたが、これもクリーム色の３階建ての美しい校舎として目に映った。ランキン・チャペルが完成するまで、大学チャペルはその校舎の３階の大教室（303号室）で行われた。これも私が入学する前のことで、そこでの大学チャペルに出席したことはない。

1　２階席の最上段の後ろに映写室があった。

ただ、私は西南学院バプテスト教会の会員（1953年受洗）だったので、西南学院教会の新会堂が建設されるまでの間[2]、このI-303で行われた日曜日の朝の礼拝に出席していた。

心に残るチャペルでの出来事に、大学紛争での全学集会がある。1960年代の後半から1970年代の前半にかけて日本の大学は大きな紛争の渦に巻き込まれた。西南学院大学も例外ではなかった。学内では、全学集会を呼びかける立看板、全共闘の反政府アジビラ、授業妨害、学外ではデモ行進が日常的な光景であった。西南学院大学に就職して数年後私は学生部委員（現学生主任）として大学紛争の最前線にいた。全学連のヘルメット集団と学内で対峙し、集団交渉の場に臨んだ。大学１号館、その後３号館も核マルの集団の拠点となり、授業料値上げをめぐって学生自治会と大学当局が対立した。結局、大学側が撤回を約束したが、それに対して、体育会が大学に説明を求める集会がランキン・チャペルで行われた。大学代表として大学執行部と関係教員は壇上に並んだ。学長は鎮痛な面持ちで弁明し、それに対して学生諸君からは非難の大声があがり、まさに修羅場であった。キリスト教の礼拝の場がこのような荒れた雰囲気に包まれたのは痛恨の極みであった。１号館の破壊、火炎瓶の投入、機動隊の導入、大学封鎖（ロックアウト）、の経緯を辿ったが、しばらくは混沌とした状態が続いた。私が２号館で授業をしようと階段を上っていると上からヘルメットの学生が降りてきた。はっとして見ると確かに私のゼミ生であった。「君、どうしたんだ」との呼びかけに、「失礼します」と言い残して走り降りていった。結局彼はゼミには出席せず、試験は受けた（受けたいと言ってきたので許可した）が、当然ながら試験はできていなかった。７、８年前にある会合でぱったり彼と会ったが、ちゃんとした仕事をしているようで安心した。

竣工当時のチャペル

2　恐らく1954年（昭和29）年頃から1955（昭和30）年６月までの期間。

◆チャペルの講話

チャペルの時間は一時期90分の時もあったが、現在の25分になって講話の長さも十数分と短いものになった。チャペルには週のテーマがあり、依頼された人は基本的にはそのテーマに添った内容を考えるのだが、私自身何度か担当した経験から考えると、テーマを与えられるとなかなか良い内容が浮かばないで四苦八苦したことが多い。自由に選べるのなら言いたいことはたくさんあるのになあ、と恨みがましく思ったこともあった。しかし、かなり前に少なくとも聖書の箇所と主題を提出することになっているので、思いつくままにそれを書いて出し、その後の時間でなんとか纏めるということになってしまう。ところが、その思いついた内容をちゃんとメモしていないと、期日が迫って原稿を書く段になって、はて、何を考えていたのかが思い起こせないこともあった。しかし、この短い時間に伝えたいことを明確に表現するという作業は大変良い訓練になった。原稿を書き、読んで時間を計り、多い箇所を削り、大事なところを補強し、起承転結を明確にすることはどんなスピーチにも適用される。担当のチャペルが終わって、心の中では一人でも私のメッセージをしっかり受け取って考えてくれる学生がいたらありがたいことだと思うようになった。

ノン・クリスチャンの先生がたにも参加していただけるようにとの配慮から、必ずしもキリスト教と直接関係ないことでも良いというチャペルがあって、学術的な話からリコーダーの演奏やピアノの演奏もあった。経済学部のＳ先生がアマチュアだけど今頑張っているというバッハの曲をピアノ演奏され、古澤嘉生先生がいたく感心されていたことを思い出す。ならば、私のようなアマチュアでも良いのかという気になってギターの演奏をしたことがあった。誠におこがましいことではあったが、普段教室でしか接しない教授がピアノやギターの演奏をするのを見聞きするのは人間味があって良いということなのだろう。ただし、その時の聴衆からの私宛のメッセージに「キリスト教の話が聞きたかった」とあったのは神学部生からかとは思ったが、上述の意図からこのようなプログラムも考慮されており、聖書の話と教員の人間的側面の披露とどちらを取るか難しいことだなあと思わされた。ノン・クリスチャンの先生がたにも参加していただくには聖書の話に限定できないだろうし、確かにチャペルだからキリスト教の話が望ましいが、そこはバランスの問題かもしれない。

◆パイプオルガン

本学のパイプオルガンは1987（昭和62）年に大学同窓会の資金的支援を加えて設置

された辻オルガン製作の本格的なパイプオルガンであるが（旧広報・調査課の本学のパイプオルガン紹介パンフレット参照のこと）、伝統あるヨーロッパの著名なオルガニストが演奏されるパイプオルガンの響きには圧倒された。いつも聴きなれている音色とは異なる音を聞くと、楽器というのは演奏者によってこんなに違う音が出るのかと驚かされことが多かった。（もちろん、普段のチャペルのオルガニストの演奏も素晴らしいことは間違いない。）大学チャペルのパイプオルガンに対するプロのオルガニストの評価が高いのは嬉しいことであった。辻オルガンの製作技術が非常に高いことを証明するものであった。

2005（平成17）年３月の福岡県西方沖地震の時には（当日は日曜日だったのでチャペルには入れなかったが）、翌日中に入り、パイプオルガンの太いパイプが１本落ちて曲がり、座席の上に横たわっているし、木製の美しい飾り窓が割れて中のパイプがあちこちへこんでいるのを見てがっくりした。しかし、その後の辻オルガン関係者のご努力で何とか復元できて幸いだった。

今回新しいチャペルで一旦解体されていたパイプオルガンが再構築され、今年の秋、設置が完成することになるが、荘厳なオルガンの音色が期待されるところである。

◆キリスト教強調週間

「キリスト教強調週間」は現在「キリスト教フォーカスウィーク」となっているが、この期間に特別チャペルが開かれ、文芸作家やオルガニスト、弁護士、社会的なボランティア活動家、牧師など著名な講師が招かれて話をされる。これまで多くの立派な働きをされた方がたが講演されたが、これも『西南学院七十年史』（下巻）pp.825－830に記載されている。そこには忽々たる顔ぶれが並んでいる。『写真　西南学院大学50年』にも戦後まもなくの頃有名な神学者E.ブルンナー博士の来学、アポロ15号で月面着陸をしたJ.B.アーヴィン元宇宙飛行士、ノーベル賞受賞作家大江健三郎氏なども講演された。私は大江氏の講演を聴き、氏の真摯な話に感銘を受けた記憶がある。また、ドイツ文学・語学者の小塩節氏は三度も来学されているので学生には人気の講師の一人だったと思うが、ドイツの歌曲などを講壇で歌われたのには驚き、感心した。その後、宗教部長に斉藤末弘[3]教授が任命され、先生の人脈から多くのキリスト教作家が強調週間の講師として招かれた。劇作家の高堂要氏も『カラマーゾフの兄弟』から良い話をされたが、氏は間もなく亡くなられた。

3　2009年３月まで理事長として尽力された。

◆ランキン・チャペルでの諸宗教活動

『西南学院七十年史』（下巻）には大学の宗教活動が記されているが、チャペル・アワー以外の学生の諸活動についても述べられている。（下巻 p.831）そのうちチャペル・クワイアは、1952（昭和27）年の創設であるが、この当時のことについては古澤嘉生名誉教授が詳しくご存知である。私は1956（昭和31）年入学とほぼ同時にチャペル・クワイアに入会したと思うが、古澤先生の指導のもとに20名くらいの男女の学生が旧チャペル・センターで練習し、折々にチャペルでの讃美奉仕に参加していた。曲は古澤先生の好みというか専門分野の古い、伝統的な曲が多く、パレストリーナ、T.タリス、W.バードからY.S.バッハ、メンデルスゾーン、チャイコフスキー、アメリカの讃美歌まで非常に幅広く演奏した。この練習は、今も教会での聖歌隊のレパートリーになっており、チャペル・クワイアでの経験が大いに役立っている。

『西南学院七十年史』の宗教部学生グループ活動一覧には記載されていないが、実際に行われた活動に聖劇グループがある。これは文学部英文学科の教授であり宣教師であられたF.M.ホートン先生の指導によるもので、年に１度はチャペルでの出演をした。私は英文学科生であったし、ホートン先生の「劇」（文学としてのドラマ）や「聖書文学」の授業も受けていたので手伝うよう頼まれたこともあり、この聖劇グループの一員であった。ホートン先生は以前俳優志願だったそうで、劇の組み立て、大道具・小道具から役の作り方まで教えていただいた。時には照明係としてランキン・チャペルの天井裏にも登り、細い梁を恐々伝って器具を取り付けたり、２階の脇から照明をあてたり、或る時には一役受け持ったり大変貴重な経験をさせていただいた。確か数人のグループであったと思うが、この聖劇の活動は長くは続かなかったように記憶している。

◆チャペル・アワーの変化

チャペルの時間は、この10年近く火、水、木曜日の10時35分から11時までの25分で全学チャペルとなっているが、チャペルの時間は長い年月の間に随分変動した。このことについても『西南学院七十年史』に記録されている。現在の形になったのは文部科学省（当時は文部省）の「ゆとり教育」のための学校週５日制の導入に伴い、大学も週５日の授業日制を取るにいたったためであった[4]。

4　本学では2001（平成13）年度から実施している。

大学カリキュラム編成上の必要性から、総授業時間の確保と時間割り編成をどうするか、チャペルの時間をどうするかの議論に多くの時間が費やされた。１日６時間編成をどう実施するか、社会人のための授業時間をどうするか、土曜日はまったく授業には使えないのか、学生諸君の課外活動の時間はどうするのか、などは大きな問題であった。チャペル時間をさらに短縮するとか、週１回にするとか、お昼休みにするとか（アメリカでは昼食は学生がそれぞれ自由に摂るのでお昼休みなどないという意見もあり）、夕方の時間帯にするとか（ヴェスパー・サービス[5]になって良い雰囲気になるのではないかとか）、大体ゴールデン・アワーをチャペルに取るのはもったいない、などの意見が出された。

しかし、私は、本学の建学の精神を大切にするには今のゴールデン・アワーが最も適切な時間帯であると主張し、譲らなかった。実際、いろいろ検討してみると、教室が足りなくなるとの主張は必ずしも根拠がなく、教員が担当したがらない第１時限を活用すれば、また供給過剰気味のカリキュラムを整理すれば必ず教室も足りるはずだし、週５日制という大義名分があれば非常勤講師の方がたにも第１時限担当のお願いもできるはずだと考えたからだった。

週３日のチャペルでは出席者が大幅に減る可能性があるとの意見もあったが、現実には現在は当時よりもチャペル出席者は増加している。もちろん、これには宗教部の方がたの大きな努力がある。以前チャペル出席が義務付けられていたころは、当然出席者は多くランキン・チャペルは満席状態であった。しかし、後ろの座席からは、開始後間も無く（氏名記載の）出席表を友人に預けて退席するものがかなりあり、チャペルに関心を持っているために自主的に出席している人たちの妨げになっていた。チャペル出席者は多いほうが良いに決まっているが、数だけが問題ではないと思う。良いプログラムには必ず出席してみようという気持ちを造り出すものだ。

チャペルはキリスト教学校の生命である。他の大きなキリスト教学校（学生数、１万人以上）のチャペルの様子は、本学と同じく自由参加であるがチャペル出席者は数十人であると聞いて驚いた。西南学院大学のチャペルは数百人の出席がある。キリスト教学のレポートがあるからチャペルに出ているとの声もあるが、強制ではなく、それでいて出席を促すという現在のやりかたも良いのではないかと思う。なぜなら、私の経験では、出ようかどうしようかと迷って結果出席して、その結局、出て良かったと思うことがはるかに多かった。というより出てつまらなかったと思ったことは一度もなかった。必ず心に響くものを得たからである。

5　vesper service－夕べにささげる礼拝、夕拝。